



# 酒とバラの日々

6月13日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

新しいソフトにはいつも戸惑ってしまう。

誰でもそうなのか、わたしだけなのか、とにかくどう扱っていいのか分からず困惑する。イラスト制作仲間から画期的なシェアウェアがあると聞いてダウンロードしたが、10日ほどそのままになっていた。昨夜思い出していじり始めたのだが、どうも基本的機能がいくつか抜けているような気がする。使い始めてかれこれ2時間ばかりになるが、まだよくわからない。単純な塗りつぶしさえできないなんて！ 一体どういうことだ。夜中にノリでこういうものに手を出すとろくなことがない。

マニュアルもダウンロードできるのだがすべて英文だ。いろいろ解説が書いてあるようだが、ちょっと読み始めたものの、チンプンカンプンだ。辞書ソフトを使ってかろうじて読み解いたところも、まるでゲームの解説みたいで、アプリケーションの解説とは思えない。ひょっとすると英語圏の人にとっては粋なジョークなのかもしれないが、わたしには悪い冗談でしかない。お手上げだ。ぬるくなったビールを飲み干し、しょぼしょぼしてきた目を押さえ、窓の外を見る。

早朝からペンキ塗りの職人がせっせと仕事をしている。こんな早くから実に勤勉なことだ。この二週間ばかり、建物のあちこちを手入れしているらしく、同じ職人の姿を何度も見かけている。五階にある仕事場の窓からは、くの字に折れた集合住宅の内側部分が見渡せ、足場を組んで作業する様子がよく見えるのだ。数日前はわたしの仕事部屋のすぐ外側で作業していたので、さすがに落ち着かなかった。実際にはそんなことはないのだろうが、部屋の中を覗き込まれているような気がしてしまったのだ。

くの字の建物の外側部分はすでに完成していて足場も取り払われている。それなりに年季の入った建物なので、修繕前、外壁の塗装はかすれてかなり痛々しいことになっていたのだが、見事に復活している。というか復活し過ぎている。元々こういう色だったんだろうか。正直びっくりした。昨日の朝、足場が取り払われて初めてその色を見た時にはぎょっとしたと言っても大袈裟ではない。建物の名がその名もローゼンハイムというので、元々こういう色だったと言われれば、そうですかと言うしかないのだが。

数年前、わたしがここに引っ越して来て事務所として使うようになった時、建物の外観はすでに完全に色あせていて、コンクリートの上に全体に淡いピンクの汚れが残っているような状態だった。それがいまや毒々しいと言ってもいいようなくっきりとしたローズピンクに（いやもうこれはローズレッドと呼ぶべきかもしれない）塗り直されているのだ。朝日を浴び、青空を背景にして、目に突き刺さるようなその薔薇色は、言葉を失わせるに十分だ。たまたまゴミを出しに出てきた住人の一人も振り返って言葉を失っていた。

「すごいですね」

「いや。なんとも」

「こういう色になるんですね」

「なるんですね」

マンションの管理組合から貰ったお知らせで外壁の塗装について連絡はあったが、どんな色にするかについては何の報告もなかったと思う。もっとも、面倒くさがって総会などには顔を出していないので、ひょっとしたら色についての説明がきちんとあったのかもしれない。しかし、ゴミ出し氏は知らなかった様子だし、わたしたち以外にもこの色に衝撃を受ける住人はいるに違いない。問題にならなければいいのだが。もう朝だが新しいビールのプルタブを開け、窓の外のペンキ塗りの作業を眺めながらそんなことを考える。

違和感があった。

しばらくの間、なぜ自分が違和感を感じているかわからなかったが、しばらくして気づいた。ペンキ職人は道を挟んだ別なマンションの屋上にいて、タンクを塗り始めているのだ。そのマンションは、わたしの住んでいるマンションとは何の関係もないはずだ。不動産会社も違うし、当然のことながらマンションについているブランド名も違う。ローゼンハイムではない。なのにそのタンクは半分以上あの毒々しいローズピンクに塗り上げられている。どういうことだ？ あいつ、何をやってるんだ？

わたしは缶ビールを持ったまま、ベランダに出る。もっとちゃんと見よう。逆光気味でもあるし、これは自分の見間違いかもしれない。いや、やはり見間違いではない。どう見ても同じ職人がペンキ塗りをしている。ひょろっとした体型。頭に巻き付けた手ぬぐいのようなもの。頭の後ろで束ねた茶色の長髪。見慣れた作業着。ひょっとしたら、とわたしは考える。不動産の管理会社が変わったのだろうか。そしてあのマンションもローゼンハイムになるのだろうか？

説明をつけようとしてそんなことを考え始めたとき、ペンキ塗りの職人が手を止め、こちらを振り向き、明らかにわたしの方に向かってにやりと笑った。そしてまっすぐこっちに向かって立つと、舞台俳優がカーテンコールで挨拶をするように右腕を大きく差し伸べ、右側の方を示し、次に左腕を大きく伸ばして左側を見ろというようなアピールをし、深々とお辞儀した。わたしは思わずベランダの柵に近づき、示されたほうを見た。信じられない光景が広がっていた。目に入る限り、マンションと言わず一戸建てと言わず、建物という建物がローズピンクに塗りつぶされている。

それは全然きちんとした塗り方ではなく、デタラメ放題で、屋根の一部が塗られていたり、住

宅の壁が一面だけ塗られていたり、道路に面した外壁が塗られていたり、それこそ屋上のタンクだけのものもある。いずれにしても街中に毒々しいローズピンクが溢れている。何だ？ あいつ何やってるんだ？ やりたい放題やりやがって。正規の職人じゃないな。勝手に塗りたいから塗っている異常者に違いない。いたずらというには度が過ぎている。驚きを静めて正面のマンションの屋上を見るともうそこには職人はいなかった。

ペンキ塗りの職人のわたしに対するあのアピールは何だったのだろうか？ たまたまベランダに出てきた人間に向けられたものだったのか、それとも意図してわたしに向けて笑いかけたのか。しかし、町をローズピンクに染め上げることにどういう意味があるのかわたしにはさっぱりわからなかった。わたしへのアピールということはないだろう。しかし、ただ偶然ベランダに出てきた人物に見せつけただけでいいのか？ ここまで大がかりに町を塗り替えておいて、たった一人の偶然の観客に見せてプロジェクトを終えるなんてことがあるだろうか？ わたしは疑問符だらけになりつつデスクのモニターに向かい、イラストの仕事に戻った。

ケータイにショートメッセージが入った。タイトルには“Unexpected foul defeat”とある。また英語か。ため息をついて辞書ソフトを開く。「思わぬ反則負け」。思わぬ反則負け？ 何だそれ？

勝ったと思ったらよく知らないルールで反則したことになるってことか？ どういう意味だ？と思いつつ、差出人を見たが思い当たらない。迷惑メールだろう、捨ててしまえとした瞬間、ふと文面が目に入り、読み進めてぎょっとする。「あなたの勝ちです。第七条、誰にも見つからずに塗り上げるべし。に反したため、職人の負け。職人はあなたのものです。次は拡大縮小に便利な虫メガネをゲットしましょう」

パソコンのモニターを見ると、イラストレーション・ソフトの右上で点滅しているアイコンがある。新たに塗りつぶし機能が追加されたことを示すアイコンだ。ペンキ職人のアイコンが向かいの屋上にいたとき同様、深々とお辞儀をしている。

(「思わぬ反則負け」 ordered by sachiwoflanagan-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

## 酒とバラの日々

<http://p.booklog.jp/book/41872>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41872>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41872>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.